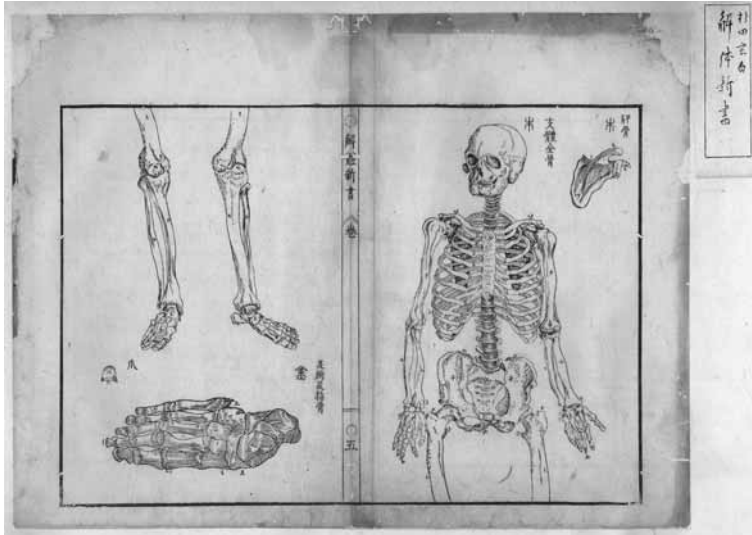


# 古典籍を標本する



『書田会 近世初期名作標本集』のうち解体新書



「書田会記録」

古典籍を調べる醍醐味の一つに、その成立事情や旧蔵者の由来を明らかにすることがあります。今回は、そうした一例として『大阪書田会／近世初期名作標本集』を紹介しましょう。内容は、刊行された版本から書物の標本を作るように、一枚ずつ貼られたアルバムのようなもの。十七世紀初頭に刊行された万葉集や太閤記、つれづれ草などの古活字版と称されるものもあれば、絵に筆で彩色をした丹緑本もあります。近世初期ではありませんが有名な歌麿の吉原青楼年中行事、杉田玄白の解体新書、曲亭馬琴の南総里見八犬伝といった書冊の中から一枚ずつ、合計五十三枚も貼られているのです。中には稀観書となったものも含まれています。巻頭には、表題とともに「明治四十五年五月撰」と記されており、明治末年の製作と分かります。こうした貼り込み帖の起源は、室町時代末頃からの「手鑑」に求められます。多くの筆跡を集めて貼り込み、その筆者の名を記した小さな付箋を付け、筆跡鑑定に役立てました。近世期には、いわゆる古筆の鑑定を職とする古筆見も登場したのです。手鑑に貼られた多くの先

人たちの筆跡は、鑑賞の対象ともなっています。『名作標本集』は、版本からの貼り込み帖ですが、その一枚一枚の右肩にその作品名を記した付箋が貼られ、「手鑑」のような役割を果たしています。注意深く見ると、印刷された付箋もあります。実際の版本から一枚一枚分けるという性格からすると、多く作れないのは当然ですが、数十部程度なら頒布可能です。つまり、この資料は同様にいくつか製作されたものの中の一つなのです。

「書田会記録」（個人蔵）という文書に拠れば、この会には幸田成友（歴史学者、露伴弟）、加賀翠溪（豊三郎、その蔵書が都立中央図書館加賀文庫）、永田有翠（鴻池銀行重役の令息）、西村天因（大阪朝日新聞主筆、「天声人語」の名付け親）、水落露石（俳人、子規門）、鹿田餘霞（古書肆鹿田松雲堂当主）といった無類の古典籍好きの面々が集まっており、明治四十三年三月から九回にわたり開かれました。このうち、幸田成友は大阪市史編纂の後、四十三年に帰京しますが、この書田会での趣向をどうやら東京でも試みたようです。文行堂横尾勇之助の「店頭日記」に「四十三年の春（略）大阪から引上げられた幸田成友君の話から、内田魯庵、林若樹君と私と加はって、大阪でやつてゐる、零本をこわして分けて、本の標本を蒐つめる会を思ひたつた」とあります。零本というのは端本のこと。書田会は、会員各自が持ち寄った秘蔵珍本の端本を分かち、本の標本を作る、その先駆けなのでした。この試みが広がり、この後多くの標本集が作られています。

『名作標本集』には「書田会記録」に記された多くの書物の一枚が残されています。水濡れや虫損などにより、本来なら廃棄されてしまいかねない端本が、書物愛好者の手を介し、形を変えて大切に伝えられていった文化遺産の一冊なのです。

※本研究はJSPS科研費 15K02285の助成を受けたものです。

（山本和明）